

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00104

研究課題名（和文）ソクラテス以前哲学における「神」概念の非譬喩性に関する史的研究

研究課題名（英文）On the non-metaphorical concept of 'god' in the Presocratic philosophers

研究代表者

三浦 要（Miura, Kaname）

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：20222317

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：ソクラテス以前哲学者の宇宙論において総じて統轄的役割を果たしている「神」に関しては、これまで、これを「脱神話化」「脱神論化」に基づいた実質的に非宗教的な概念であり、宗教的重要性を持たない譬喩にすぎないとする解釈がなされてきた。しかしこのような解釈は妥当性を欠いた皮相的なものと言わざるをえない。確かにソクラテス以前哲学者たちが目指したことは「宗教改革」ではなく「自然理解」であったが、彼らはその枠組みの中で伝統宗教を超越しながらも依然として宗教的心性を堅持しつつ独自の神概念を構想していたのであり、その限りで、彼らの「神」概念が「譬喩」として回収しきれない複雑な内実を有する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ソクラテス以前哲学者は、自然の説明において擬人主義的神々を排除して抽象的レベルへと上昇しながらも、人によって生きられるこの自然的世界を根底から支えている力に対して、矛盾も葛藤もなしに明らかに原初的な尊崇や畏怖、賞賛といった宗教感情を自覚的に保持し続けている。その限りで、彼らの自然学説や宇宙論における合理的原理である「老いることのない永遠の神」は、決して譬喩ではなく彼らの宗教的心性が反映された文字通りの神であり、彼らの非譬喩的な「神」と合理的自然学とは連続一体的なものとして調和をなしている。かくして彼らの「神」を非宗教的概念と捉える伝統的解釈に問題があることを示した点に成果の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：'Gods' or 'the divine' in the cosmologies of the so-called Presocratic philosophers have often been interpreted as a substantially non-religious concept based on 'de-mythologization' and 'de-theologization'; according to this interpretation, the term 'God' is used as a mere metaphor without religious significance. However, such an interpretation can be deemed superficial and invalid. It is true that the Presocratics aimed at 'understanding nature' rather than 'reforming religion,' but they, with still maintaining a religious mentality, established their own concept of 'God' by surpassing traditional religions within their inquiry into nature; their concept of 'God' certainly possesses a complex reality that cannot be fully captured as a mere metaphor.

研究分野：哲学

キーワード：ソクラテス以前哲学 神 自然神論

1. 研究開始当初の背景

(1) ソクラテス以前哲学の特質をめぐっては、二つの対立する見解がある。ひとつは、「神話から哲学へ」や「宗教から理性へ」という移行図式を背景に、ソクラテス以前哲学は神話や宗教からの解放の結果であり、その革新的な自然学説は完全に自然的な言葉遣いで定式化され、神的存在を顧慮することのない知識探究の道を拓いた、とする見解である。その科学的方法を強調し、ソクラテス以前哲学者はもはや哲学者でなく科学者の名で呼ばれるべきだと主張する者さえいる。その場合、彼らの宇宙論は、脱神話化を通じて、超自然的存在や宗教的信仰の対象を自然から排除することを目指したものと見なされることになり、彼らにおいてたとえ「神」が主題化される場合でも、その概念は、宗教的コンテキストから離れた「譬喩的解釈」を容れる概念となる。このと対立するもうひとつの見解は、ソクラテス以前哲学は宗教の直接の後継者で、多様な自然世界についての彼らの見解は、依然として神と自然の関係に関する古い宗教的な考え方に支配されているとする立場である。この立場に立てば、この解釈はピュタゴラスやエンペドクレスにおける宗教的魔術的信念や神秘主義を不当に過小評価しているものということになる。

(2) しかし、ソクラテス以前哲学について、それが伝統的宗教の超克の結果か、それとも伝統的宗教の維持と継承発展の結果なのかという単純な二者択一的問い方で、その特質や宗教との関係が十全に理解できると思われず、この単純化により、重要な局面がことさらに切り捨てられることにならないだろうか。むしろ、いずれかに偏することのない解釈の可能性を追求する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 「万物は神々に満ちている」と主張したタレスに典型的に見られるように、概してソクラテス以前哲学の宇宙論では、「神」が経済性と整合性を持った説明原理として導入されるが、しかしそこには「神論」はなく、万物を自然的な実体と見なす自然主義的哲学があるのみだ、とする合理的見解が既に古代から存していた。プラトン校訂者として著名な J. Burnet も、哲学者の神々は崇拜の対象ではなく、我々を遙かに超える自然の力を単に宗教的神になぞらえた結果にすぎないとする。かくして「神」とは譬喩的な説明概念ということになる。

(2) しかし、クセノパネスやヘラクレイトスの「神」、エンペドクレスの「愛」と「争い」、アナクサゴラスの「知性」等の神的存在を、自然の抽象的力の譬喩的表現として解釈することは、彼らが自然学に反映させていると思われる宗教的心性を無視しているのであり、その「神」概念の豊穡さを看過することにつながる。確かに彼らの自然学において伝統的宗教批判を見出すことはできるが、脱神話化や脱擬人主義がそのまま無神論的宇宙論に直結するわけではない。

(3) 改めて、ソクラテス以前哲学者の「神」概念を非宗教的概念と見なす合理主義的解釈を批判的に再検討し、「譬喩」として回収しきれない彼らの宗教的心性が厳然として存在していることを明らかにすること、これが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 従来から、ソクラテス以前哲学者における「神」はしばしば、自然化されたものとして「神秘性」よりむしろその「合理性」に強勢が置かれることで、非宗教的な単なる譬喩的概念とされてきた。本研究では、原典の精確な読解を通じて、「神」に譬喩性を読み取るこの解釈を批判的に再検討し、これが妥当性を欠いた皮相なものであり、彼らは伝統宗教を超克しながらも依然として宗教的心性を堅持しつつ独自の神概念を構想していたことを明らかにする。

(2) 具体的には、ヘシオドスにおける万物の起源たる「カオス」とミレトス派の神的神的アルケーとの関係、ミレトス派以外のイオニア派のヘラクレイトス、クセノパネス、エレア派の宇宙論における神的存在、合理的な機械論的原子論における「神」の意味、ソクラテス以前哲学とプラトンとの「神」概念における関連性、というこれら四つの点に関して一次文献、参考文献を読み解いて検討を加えていく。

4. 研究成果

(1) クセノパネスとヘラクレイトスに批判されていたヘシオドス(前8世紀末)は、『神統記』で「カオス(空隙)」を神々も含めた万物の起源として措定した。「カオス」を起源としたことに、ヘシオドスの世界観、そして世界と人間との関係についての見解を端的に見て取ることができる。すなわち、万物の起源は人間にとって根本的に認知不能であり不明瞭なものであって、要するに世界の構造そのものが不可知なものと見なされている。それは無論、ホメロス以来周知の人間の認識能力における有限性にもよるが、それだけではなく、そもそも万物は永遠不変のあり方をしているわけではなく、世界は本来的につねに生成と運動と変化と多様性によって特徴付け

られており、それについての「致死k」は成立せず、人間は世界をまさに生成と変化と多の相において捉えるのみなのである。

(2)これに対してミレトス派は、よく知られているように世界の起源を「水」、「ト・アペイロン」、あるいは「空気」などの物質的要素と考えたわけだが、このことは、感覚が示す生成、運動、変化、多様性を越えて何かもっと根源的なものがあり、その起源が一なるものであり、人間にとって認識と分節化が可能なものであると考えたということである。生成/存在、運動/静止、多様/一、変化/永遠という二項対立で言えば、各対立の前項において世界と万物を捉えるのがホメロスやヘシオドスだとしたら、後項において捉えたのがミレトス派ということになる。人間は神々や万有についての真理ではなく「思わく」のみを持ちうるとし、一なる非性的神を想定したクセノパネスは、その点で前項から後項への移行のただ中にあると言える。ミレトス派にとっての神的アルケー（始源）は、超自然的に振る舞う存在であるわけではなく、むしろ、自然的秩序の一部分として、あるいは自然的存在一般と連続性・持続性を有する、いわば意志する行為者的存在と考えられている。そもそも、ミレトス派において、さらにはパルメニデス以後の自然哲学においても、生命、生氣、知、目的などは、自然世界にとって基本的・本質的なものでありつづけているのであり、「超自然的」なる存在は構想されていない。

その点は、ミレトス派自然哲学に対して「存在」に「非存在」を導入してしまっているとして根本的な批判を加えたパルメニデス、そしてサモスのメリッソスの実在規定にも見て取れる。特に、パルメニデスによる実在規定に批判的修正を加えながら自らの実在規定を演繹して見せたメリッソスは、「有るもの」が苦痛も苦悩も感じることのないものだとして主張しているが、このパルメニデスにも見出すことのできない規定は、メリッソスが自然哲学の世俗化を目指して、ミレトス派のアルケーとは対比的に「有るもの」が生きているとか神的であるとする余地を与えないようにしたかったことを示すものではない。彼にとっての「有るもの」は、クセノパネスに見られたように神人同形論を排除した抽象的なものであると同時に、知的能力も含む、不死不生ですべてを包括する力をもった健全な思惟する主体として構想されているのであり、「有るもの」から生物学的特性一般を根本的に排除しようとしたものではないのである。そのかぎり、メリッソスもやはり、多様性をはらみつつ存在、静止、一、永遠へと展開していったギリシアの自然哲学に連なりうるものである。そしてまた、彼のこの規定は、彼がパルメニデスのなかに思惟と実在の同一性を読み取った可能性を示唆しているとも言えるのである。

(3)ミレトス派と同様にイオニア地方で活動したヘラクレイトスは、先の二項対立の枠組みで考えるとむしろホメロスやヘシオドスの側に位置するように思われるかも知れないが、じっさいには万物を流転の相においてのみ見たのではなく、むしろその流転自体の安定性、規則性、均衡性に優位性を認め、そして、動的な均衡と調和を支配する原理を神的ロゴスと見なし、知者による真理の認識を許容していた。その点で、ヘラクレイトスは明確にミレトス派の側に位置している。彼には、「反対者の同一性」の原理を踏まえた「不死なる者が死すべき者、死すべき者が不死なる者」という不可解な言明（「断片」62DK）が帰されており、不死なる神と可死の人間という伝統的な二分法に即して捉えようとするとその真意は把握困難となる。

ヘラクレイトスにとっての神は、擬人的神ではなく、現象世界におけるあらゆる種類の反対関係を、その都度、善なるあり方としての統一を与えることで支配している原理そのものであり、したがって、可死の人間やその魂（たとえ「死」により身体から魂が解放されたとしても）と同定される余地はない。彼より後のいわゆるエンペドクレスによれば、個別性を保持しつつ輪廻転生するダイモン（神的起源を有する魂）は、禁忌を守り清浄な生を送ることで「神」となるとされていたが、これに対してヘラクレイトスは魂の不死性と転生を認めていたとはいいがたく、オルベウス教やピュタゴラス派の唱える魂転生説を信奉していたわけではない。先の言明も、「生と死、覚醒と眠り、若さと老い、これは同じものである」という別の言明（「断片」88DK）と併せて解釈する必要があり、つまりそれは、エンペドクレスとは異なり、神霊（ダイモン）の通時的転生でなく、むしろこの生における魂の諸状態の共時的な対立・拮抗関係を語るものと考えべきである。現にある我々のこの「生」は生と死の対立をそのまま対立するものとして含み持ちながら成立していて、各々が、その都度、生の力と死の力の統一体として、生者であると同時に死者でもある。我々は二つの相反する力の対立を生きているのである。

(4)ミレトス派をはじめとする初期の自然哲学者の中で、広い意味での無神論の立場に最も親近性を有すると思われるのが前5～4世紀の原子論者レウキッポスとデモクリトス（そして彼らを継承するエピクロス）である。しかし、彼らにおいても依然、神（原子で構成される）が言及される。目的論を採りえない原子論の宇宙形成において企図や神慮は問題外であるはずだが、それでもなお彼らは神を語る。特にデモクリトスにおいては、それ自体も原子の複合体である神々は「射影像」と同定され、道徳的性格と知性と人間への関心をもつ有限の存在であり、自然的世界の創造者でも統括者でもないとされており、その点で、デモクリトスは、例えば宗教的変革者であるクセノパネスと比較しても、さらには初期のミレトス派と比較しても、より保守的な宗教観をもっていたと見なされることもある。

しかし、射影像自体がデモクリトスにとっての唯一の神的存在と解することには（確かに古代の諸証言はそれを支持するかに見えるが）疑問が残る。クレメンス『雑録集』V88での「デモクリトスは、神的なウーシアー（存在）から人間たちにも理性をもたない動物たちにも射影像が

落ちかかってくる、としている」という証言に見られる単数形の「神的存在」は、現象の背後にあってその成立原因の役割を果たすものとみることにも可能である。つまり、射影像は単に認識主体の魂に依存した心理的情態にすぎないわけではなく、その射影像を発出する源としての実在的な神を想定することができる。この概念は、デモクリトスの宗教の成立や起源に関する説明における射影像とは明確に区別して検討されるべきであり、さらに言えばレウキッポスが「ロゴス」そして「必然」と呼んだものとこの存在とを関連させることができるなら（資料上の制約から、それ自体容易なことではないが）、そこに原子論者の固有の「神」観（けっして譬喩にとどまるものではない「神」）を認めることもできるのではないか。

（５）原子論者と同時代のプラトンは『法律』第10巻で、モデル国家での不敬罪に関わる法律の制定に関連して文字通りの無神論的見解に対し入念な反論を展開し、神々の属性の説明の前提となる神々の存在そのものを論証することを目指す。『法律』より前にすでに『国家』においてプラトンは、神々の物語についての規範として、「神が本当にそうであるような性格を、つねに必ず与えなければならないこと」を立てたが、この規範は『法律』においても機能しており、プラトンがその存在を証明しようとしている「神々」とは、オリュンポスの宗教における人間的属性をもった伝統的な神々などではない。それは、脱神人同形論を前提とする神々の信仰につながるものであり、その限りで、彼の立場は「神々の存在は認めるが、それは国家の認める神々と同一ではない」という広い意味での無神論ということになる。これは、プラトンがクセノパネスなどと同様に、伝統的宗教よりも自然主義的神論への志向性を有していることを示唆する。プラトンが論駁の標的とする自然哲学は、神々の存立の余地を残す言わば「異端説」ではなく、むしろ、魂をもたない物質が宇宙世界全体の形成原因をなしていると主張して神々の存在を無条件に否定する無神論なのである。そして、ここで批判されている自然学説は、タレス以降の諸々の自然学説の特質を踏まえつつも、議論のために、つまり「魂＝神」という有神論の立場との相違を鮮明にするために構成されたものと言ってよく、特定の初期ギリシア自然哲学者の説ではない。実際、原因説明から排除されていると言ってプラトンに批判された魂、知性、目的、秩序といった要素は、ギリシア自然哲学者たちの現実の自然学説では、その「神」概念との関連においてきわめて重要で実質的な役割を演じているからである。

（６）本研究が目指した宗教的観点からの初期ギリシア自然哲学の研究については、国内ではそもそもソクラテス以前哲学者に関する研究がほとんどない状況で、ましてや彼らの宗教性や神概念に関しては、研究が全く行き届いておらず、研究の空白領域となっており、本研究はその空白を多少なりとも埋めるものであり、その限りで一定の意義を有する。今後の展望としては、本研究で十分に扱うことのできなかつたいわゆるソフィスト（特にプロタゴラス、ゴルギアス）に関して、宗教を人為的制度と見て神を虚構の産物とする単純な「無神論」と見なすのではなく、その「無神論」の特質と射程を、初期ギリシア自然哲学における「神」観と関連させながら考察していきたいと考えている。

< 引用文献 >

- Bremmer, J. N., "Atheism in Antiquity", in M. Martin (ed.), *The Cambridge Companion to Atheism*, Cambridge, 2007, pp.11-26.
- Brémond, M., "Identity through time: Melissus' s demonstration that being is homoios", *Ancient Philosophy* 39, 2019, pp.23-42.
- Broadie, S., "Rational theology", in Long(1999), pp.205-224.
- Burnet, J., *Early Greek Philosophy*, London, 1934.
- Chitwood, A., *Death by Philosophy. The Biographical Tradition in the Life and Death of the Archaic Philosophers Empedocles, Heraclitus, and Democritus*, Ann Arbor, 2004.
- Conche, M., *Héraclite. Fragments*, Paris, 1986.
- Curd, P., *The Legacy of Parmenides. Eleatic Monism and Later Presocratic Thought*, Princeton, 1998.
- Debrunner, A., "«ENI» als Kopula - eine Nachprüfung", *Museum Helveticum*, Vol.11, 1954, pp.57-64.
- Diels, H. & Kranz, W. [DK], *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Berlin, 1951-52.
- Ellis, F., "Atheism and naturalism", in A. Carroll and R. Norman (eds.), *Religion and Atheism. Beyond the Divide*, London and New York, 2017, Part II, ch. 6, pp.71-81.
- Graham, D. W., *The Texts of Early Greek Philosophy. The Complete Fragments and Selected Testimonies of the Major Presocratics*, Part I, Cambridge, 2010.
- Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy*, Vol.II, Cambridge, 1969.
- Harriman, B., *Melissus and Eleatic Monism*, Cambridge, 2019.
- Loenen, J. H. M. M., *Parmenides, Melissus, Gorgias. A Reinterpretation of Eleatic Philosophy*, Assen, 1959.
- Long, A. A., "Parmenides on Thinking Being", *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 12, 1996, pp.125-151.
- Long, A. A. (ed.), *The Cambridge Companion to Early Greek Philosophy*, Cambridge,

1999.

Mansfeld, J. et al., *ELEATICA 2012: Melissus between Miletus and Elea*, Sankt Augustin, 2016.

Parmer, J., "Melissus and Parmenides", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 26, 2004, pp.19-54.

Phillips, E. D., "Parmenides on Thought and Being", *The Philosophical Review* 64, 1955, pp.546-560.

Pradeau, J.-F., *Héraclite. Fragments (Citations et témoignages)*, Paris, 2002.

⑲ Ramnoux, C., *Héraclite ou l'homme entre les choses et les mots*, Paris, 1968.

⑳ Schofield, M., "Heraclitus' theory of soul and its antecedents", in Everson, S. (ed.), *Psychology. (Companions to ancient thought 2)*, Cambridge, 1991, pp.13-34.

㉑ Sedley, D., "Parmenides and Melissus", in Long (1999).

㉒ Solmsen, F., "The "Eleatic One" in Melissus", reprinted in F. Solmsen (1982), *Kleine Schriften III*, Hildesheim.

㉓ 内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』第II分冊(第30章「メリッソス」三浦 要訳) 岩波書店, 1997年。

㉔ G・S・カーク, J・E・レイヴン, M・スコフィールド [KRS](内山勝利, 木原志乃, 國方栄二, 三浦 要, 丸橋 裕訳),『ソクラテス以前の哲学者たち(第2版)』京都大学学術出版会, 2006年 (G.S.Kirk, J.E.Raven, M.Schofield (1983), *The Presocratic Philosophers: A Critical History with a Selection of Texts*, 2nd ed., Cambridge).

㉕ 藤澤令夫,「知るもの,生きるもの,動くもの」,『藤澤令夫著作集』岩波書店, 2000年。

㉖ 藤澤令夫,『プラトンの認識論とコスモロジー』岩波書店, 2014年。

㉗ 三浦 要,「人はどこまで真実に迫れるのか ソクラテス以前に見る認識論の史的展開」, 渡邊二郎監修, 哲学研究会編,『西洋哲学史再構築試論』昭和堂, 2007年。

㉘ 三浦 要,『パルメニデスにおける真理の探究』京都大学学術出版会, 2011年。

㉙ 三浦 要,「無神論と有神論のはざままで ソクラテス以前哲学における「神論」の特質をめぐって」,『哲学・人間学論叢』第8号, 2017年, pp.63-79.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 三浦要	4. 巻 14
2. 論文標題 古代ギリシア思想における「無神論」について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学・人間学論叢	6. 最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦要	4. 巻 72
2. 論文標題 死の形而上学 エピクロスによる死の分析を起点に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 点から線へ	6. 最初と最後の頁 44-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦要	4. 巻 13
2. 論文標題 パルメニデスにおける「思考」と「有るもの」について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学・人間学論叢	6. 最初と最後の頁 75-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三浦要	4. 巻 69
2. 論文標題 (書評) B. Harriman, Melissus and Eleatic Monism	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 160-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦要	4. 巻 12
2. 論文標題 ヘラクレイトスの「断片」88 (DK)について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 哲学・人間学論叢	6. 最初と最後の頁 71～89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三浦要	4. 巻 11
2. 論文標題 メリッソスにおける「有るもの」の同一性論証をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学・人間学論叢	6. 最初と最後の頁 53～66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> ・講演「死の形而上学 エピクロスによる死の分析を起点に」, 石川県西田幾多郎記念哲学館, 2021年7月17日 ・「海外雑誌論文紹介」, 『古代哲学研究』第53号, 2021年, p. 54 ・「海外雑誌論文紹介」, 『古代哲学研究』第52号, 2020年, p. 44 ・「海外雑誌論文紹介」, 『古代哲学研究』第51号, 2019年, pp. 57, 58 ・金沢大学学術情報リポジトリ『哲学・人間学論叢』 https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=194

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------